

# 蓮如における宿善

## 一 樂 真

### 一 はじめに

蓮如における真宗再興の精神が歎異の精神であると喝破したのは、曾我量深であった<sup>①</sup>。それは蓮如が『歎異抄』を自ら書写し、奥書を付していることに注目したことによる。その奥書とは、『歎異抄』の現存最古の写本であるいわゆる「蓮如本」の末尾に置かれる次の言葉である。

右斯聖教者、為当流大事聖教也。

於無宿善機、無左右不可許之者也<sup>②</sup>。

曾我の指摘は、蓮如の真宗再興の意義を見ていくうえで、重要に思われる。ややもすると、蓮如における真宗再興が本願寺という一教団を大きくしたという意味で述べられることがある。それに対して曾我の指摘は、宗祖親鸞の教えを時代と人々との関わりの中で明らかにすることに蓮如の願いがあったことを確かめるものである。これは現代を生きる私たちにとっても、時代の中で真宗に生きるとはどういうことを考える大切な視座になると思われる。

ところが、この蓮如の奥書がさまざまな憶測を生んできたことも事実である。その一つとしてあげられるのが、蓮

如の奥書によって『歎異抄』が非公開の書として扱われてきたというものである。これについては西田真因氏によって明らかにされている通り、宗字の中でも『歎異抄』は禁書として扱われていることはない。<sup>③</sup>

また蓮如の奥書は、蓮如自身においても決して非公開にするための言葉ではなかったと考える。それは、『歎異抄』の影響を受けながらも、自ら『口伝鈔』『改邪鈔』を著して、『歎異抄』を表に出すことのなかった覚如の姿勢と比べてみてもすぐに分かることである。

蓮如は自ら書写した『歎異抄』に「蓮如之」と袖書きしており、自らの座右に置いていたと考えられる。<sup>④</sup>また、早くから妙音院了祥が指摘しているように、『御文』に頻出する「たのむ」の語は『歎異抄』の影響であると考えられる。<sup>⑤</sup>また、弥陀のはからい、もよおし、なども『歎異抄』に出る。この点から見ても、蓮如にとって『歎異抄』は大きな意味をもっている。これまで、蓮如の思想を覚如・存覚などの影響のみで位置づけようとする見解が多いが、さらに『歎異抄』にまで遡って考える必要があると思われる。

宿善の語に関しても、従覚の『慕帰絵詞』や乗専の『最須敬重絵詞』に記される覚恵と唯善の宿善・無宿善をめぐる論争を根拠とし、蓮如もその系譜に並べる見解がある。<sup>⑥</sup>その詳細な対比検討は本稿の主題からするので今は立ち入らないが、覚恵・覚如・存覚の影響を見るだけではなく、さらにその背景にまで遡って蓮如の思想を尋ねていくべきであると考えている。

このような意味で、『歎異抄』を本願寺教団の表に出さなかった覚如の姿勢に対して、『歎異抄』を「大事の聖教」として位置づけた蓮如の意図がもっと注目されて良いはずである。ただ、この小論では、蓮如が語る「宿善・無宿善」がどういう意味をもっているのかという点に問題を絞って尋ねていきたい。それによって、蓮如が「無宿善の機」においては、左右なく之を許すべからざるものなり」と言ったことの意味を明らかにしていきたい。

## 二 宿善の使用例

まず『歎異抄』の奥書に出る「無宿善機」の語がどのように読まれてきたかを一瞥しておきたい。

・自力の念仏者などに、此の書を許容すべからず。自力根性をもって、他力の至極をしらず。かえりて邪見なりと誹謗して、謗法の罪を招くべきがゆえに。  
(円智「歎異抄私記」一六六二)

・仏の教法を受くべき可能性のないひとには、むやみに見せてはならない。  
(佐藤正英「歎異抄論註」一九八九)

・前世における善行のなくて、仏の教法を受ける資格のない人においては、容易に披閲・書写することを許可してはならないものである。  
(安良岡康作「歎異抄全講読」一九九〇)

・真剣に仏法を聞く気のない人には、十分考慮することなく安易に、この書を見せてはならない。

(谷川理宣ほか「歎異抄事典」一九九二)

それぞれの著者の意図は別の所にあるとしても、無宿善の機が特定の者を指すように読める。しかも、無宿善ということの原因が人の資質や能力の問題として捉えられてしまうような表現になっている。そうなると、蓮如の奥書は、見せてもよい者と見せてはならない者を選べつという意味になる。しかし、誰に宿善・無宿善を見極める力があるのだろうか。親鸞の同朋精神に立つことを生涯をかけて人々に勧め続けた蓮如が、人を類別せよと言うだろうか。この辺りに蓮如を理解していく時の難しさがあるのかもしれないが、軽々に蓮如の二面性というようにすることで押さえてしまつてはならないと思う。それ故、蓮如が用いている「宿善」という言葉の例を見ていくことから先ず始めたい。

蓮如の「御文」は、堅田修氏の整理によれば(真宗史料集成第二卷所収)、現在二五二通を数えるが、宿善の語は早くは文正元年(一四六六 蓮如五二歳)のものから、明応七年(一四九八 蓮如八四歳)の年紀をもつものまで、広く見る事ができる。その中で、まず注意されることは、宿善ということが言われるときには、必ずといってよい

ほど信心の獲得、或いは仏法との出遇いが関わっているということである。

ただ信心をおこすというも、これあながちにわがかしこくておこすにはあらず。そのゆえは、宿善ある機を、弥陀の大慈大悲によりて、かたじけなくもよくしろしめして、無碍の光明をもって十方世界をてらしたまうとき、われらが煩惱悪業のつみ、光明の縁にあうによりて、すなわち罪障消滅して、たちまちに信心決定する因はおこさしむるものなり。

(真宗史料集成第二卷一三九頁)

光明の縁にもよおされて、宿善の機ありて他力の信心とすることをばいますでにえたり。これしかしながら弥陀如来の御方よりさずけましましたる信心とはやがてあらわにいられたり。かるがゆえに、行者のおこすところの信心にあらず、弥陀如来他力の大信心ということは、いまこそあきらかにいられたり。

(真宗史料集成第二卷一九六頁)

ここには、信心を得ること、信心が決定することが弥陀のはたらきによること、がまず読みとれる。弥陀が宿善ある機をしろしめして、或いは宿善の機があつて弥陀より信心をさずけられる、と表現には小異があるが、ともに宿善がもとになって弥陀のはたらきにあずかることが示されている。

一般に宿善といえは宿世の善根を意味し、その有無や善根の多少ということが問題にされるところである。その見方からすれば、宿善ある機とはいかにも宿善をそなえた人を予想させる言葉ではある。しかしながら、蓮如の場合、宿善が有るか無いかを実体的に論じようとするものではないと思われる。すなわち、開発するものという視点から宿善を述べていることが注意される。そのことが次に挙げるいくつかの文章から窺える。

おおよそ当家には、一念発起平生業成と談じて、平生に弥陀如来の本願のわれらをたすけたまうことわりをききひらくことは、宿善の開発によるがゆえなりとこころえてのちは、わがちからにてはなかりけり、仏智他力のさずけによりて、本願の由来を存知するものなりとこころうるが、すなわち平生業成の義なり。

ただわが身は極悪深重のあさましきものなれば、地獄ならではおもむくべきかたもなき身なるを、かたじけなくも弥陀如来ひとりたすけんという誓願をおこしたまえり、とふかく信じて、一念帰命の信心をこそせば、まことに宿善の開発にもよおされて、仏智より他力の信心をあたえたもうがゆえに、仏心と凡心とひとつになるところをさして、信心獲得の行者とはいうなり。

いま他力の信心を獲得するも、宿善開発の機によりてなり、さらにわれらがかしこくしておこすところの信心にあらず、仏智他力のかたよりあたえたまう信なりと、いよいよしられたり。このゆえに、もし宿善もなく、また聖人の勸化にもあいたてまつらずば、この法をきくこともかたかるべし。

ここには、宿善の開発によって、仏智よりあたえられ、さずけられるのが信心であることが確かめられている。人間の力や賢さによって起こすものではないということは、人間の思いやはからいを超えた、いわば自力の無効を押さえた言葉である。

親鸞は信心の発起について善導讃の中、「われらが無上の信心を発起せしめたまいけり」の「発起」に左訓を付している。「ひらきおこす たておこす むかしよりありしことをおこすを発起といふ いま初めておこすを起といふ」という左訓である。<sup>⑦</sup>「いま初めて」の「起」に対して、むかしよりありしことが開かれておこるという意味を「発」の字義と見ている。つまり、発そのものに開発という意味があると言えよう。

今、これを直接に蓮如が承けていると言うことはできないが、宿善開発にはむかしよりあったことが開かれてくるという意味が読みとれる。それは人間が自分の力や賢さを当てにして積み上げてきたというような程度の善根というのではない。仏智のはたらきによって呼びかけられ、支えられてきたことを意味している。

この意味で、宿善開発という言葉には、信心を得ることができたという感動が込められている。それは同時に、む

かしより仏智のはたらきの中に在りながら、それに気づかずして過ごしてきた我が身であったことへの懺悔である。それ故、宿善開発とは、「宿善のもよおし」とも述べられるように、信心の獲得が仏智のはたらきに支えられて成り立つことを押さえる言葉である。それは『歎異抄』でいえば、「ひとえに弥陀の御もよおしにあずかつて、念仏もうしそろううひと」という言葉で述べられていることと重なる表現である。この「もよおし」ということを、蓮如はくり返し述べている。『御文』の中からそのいくつかを次に挙げてみる。

いまこの時節にいたりて、本願真実の信心を獲得せしむる人なくば、まことに宿善のもよおしにあずからぬ身とおもうべし。もし宿善開発の機にてもわれらなくば、むなしく今度の往生は不定なるべきこと、なげきてもなかなしむべきはただこの一事なり。しかるにいま本願の一道にあいがたくして、まれに無上の本願にあうことを得たり。まことによるこびのなかのよろこび、なにごとかこれにしかん。とうとむべし、信ずべし。

(真宗史料集成第二卷二二二頁)

弥陀に帰命すというも、信心獲得すというも、宿善にあらずということなし。しかれば念仏往生の根機は、宿因のもよおしにあらずば、われら今度の報土往生は不可なりとみえたり。このころを聖人の御ことばには「遇獲信心遠慶宿縁」とおおせられたり。

(真宗史料集成第二卷二一九頁)

もし我等も宿縁おろそかならば、聖人のこの一流にはあいたてまつりがたきものをや。されば、万が一も此の流にあいもうさずんば、すでに今度の一大事の報土往生はむなしからん事をおもうに、誠になげきてもなおなげくべきものか。このゆえに、宿善のもよおすところ、悦びても猶悦ぶべきはただ此の事なり。

(真宗史料集成第二卷二六五頁)

ここには、宿善のもよおしによって本願に遇い、信心を獲得することが、何物にも代えがたい喜びであることが述べられている。どこまでも、仏法に出遇えた喜びを語る言葉が宿善であり、宗祖親鸞の「たまたま信心を獲ば遠く宿

縁を慶べ」の語に通底していることが知られる。教えに出遇うことも、弥陀に帰命することも、信心を獲得することも、人間の生まれや能力や経歴ではなく、宿善のもよおしによるものである。それ故、宿善のもよおしに気づくことこそが大切なのであって、決して自分で善根を積み上げようということでもなければ、ましてや誰に宿善があるか無いかと詮索する話ではないのである。

『実悟日記』が伝える蓮如の言葉に、「宿善めでたしというは、わろし。御一流には、宿善有り難しと申すが、よく候う」<sup>①</sup>と述べられるように、蓮如にとって宿善とは有り難しといただくことであった。自分で積み上げた善なら「めでたし(すばらしい)」と自分で誇ることもできるかもしれない。しかし、たまたま出遇うことができた、思いを超えた世界を知らされたという喜びであるからこそ「宿善有り難し」というほかはないのである。

これに対比してみれば無宿善という語の意味もおのずと明らかになると思う。つまり、だれが無宿善であるかというように、人を類別するための言葉ではなく、信心を得ることができないこと、いまだ宿善が開発していないこと、宿善のもよおしにあずかっていないこと、それが無宿善の意味であると思われる。つまり、いまだ時が熟しておらず、信心を得ることができない在り方を無宿善と押さえるのであって、決して能力や素質が劣っているというような、個人的資質を言うものではないのである。次にそのことを確かめていきたい。

### 三 無宿善の機

いかに昔より当門徒にその名をかけたるひとなりとも、無宿善の機は信心をとりがたし。

(真宗史料集成第二卷二二五頁)

これが、無宿善の機について蓮如が述べる典型的な例といつてよいが、こういう部分だけを取り上げて、蓮如が人を類別したかのように見なしてきたのではなからうか。ところがこれは先にも尋ねたように、宿善開発しなければ信

心は獲がたいことを強調している言葉である。人間の生まれや能力や経歴が信心を獲得する因にはならないことを確かめるものである。親鸞の門徒として名をいくら運ねていても、それが獲信につながるわけではない、このように蓮如が述べなければならなかったところには、門徒であることをもって獲信を自明のこととしてしているような現実があったに違いない。生涯をかけて「信をとれ」と呼びかけ続けた蓮如の姿勢を思う時、どれほどの悲歎がそこに込められているかに思いをいたすべきではなからうか。

自らが親鸞の門徒であることを疑わない人々、自ら念仏者であると思っている人々、蓮如の言葉は、その在り方自体を問うている。つまり、無宿善の機と呼びかけることを通して、改悔・懺悔を求めるのである。それによって信心獲得をいよいよ勤めるのである。

今日よりして廻心改悔の心なくば、誠に以て無宿善の機たるべきあいだ、このたびの報土往生は大略不定とこころうべきものなり。  
(真宗史料集成第二卷二三八頁)

ただし無宿善の機にいたりてはちからおよばず。しかりといえども、無二の懺悔をいたし、一心の正念におもむかば、いかでか聖人の御本意に達せざらんものをや。  
(真宗史料集成第二卷二五六頁)

ともに、宗祖聖人の本意にそむいていることを歎き、本意に帰らせようとする趣旨が窺える。誰か特定の人を無宿善の機であると決めつけ、排除しようとするのではない。どこまでも呼びかけ続けていくところに蓮如の姿勢がある。教えを聞きながら教えに遇えない、弥陀のもよおしの中にあるながらもよおしに気づかれない、そういう者に対しての厳しい呼びかけが無宿善という言葉にはある。その意味で無宿善と知らされることは、これまでも教えの中にありながら教えに背いていたという、我が身に対する深い懺悔をともなうものである。

#### 四 宿善・無宿善を分別せよ

これまで尋ねてきたように、仏法は「仏智のもよおし」という言葉に代表される阿弥陀仏のはたらきによって伝わることを押さえたのが宿善という語といえる。そこには、人間がどれほど思いはからつても云何ともしがたいものがある。「宿善も純熟し」<sup>⑭</sup>とか「時節到来」<sup>⑮</sup>という言葉で語られるように、時が熟することを要するのである。それ故、蓮如は仏法との出遇いにおいて大切な意味をもつ善知識に対しても、その役割を次のように確かめる。

そもそも善知識の能というは、一心一向に弥陀に帰命したてまつるべしと、ひとをすすむべきばかりなり。これよつて五重の義をたてたり。一つには宿善、二つには善知識、三つには光明、四つには信心、五つには名号。

この五重の義、成就せずば往生はかなうべからずとみえたり。されば善知識というは、阿弥陀仏に帰命せよといえるつかいなり。宿善開發して善知識にあはずば、往生はかなうべからざるなり。しかれども帰するところの弥陀をすて、ただ善知識ばかりを本とすべきこと、おおきなるあやまりなりとこころうべきものなり。

(真宗史料集成第二卷一九三頁)

親鸞も「一切梵行の因は善知識なり」と『涅槃經』に依りながら述べているほど、<sup>⑯</sup>仏道の歩みにおいて善知識は重要である。しかし、それは善知識が何でもできるということを意味してはいない。善知識との出遇いも縁が熟してこそ成り立つ。そのことを蓮如は宿善という言葉に託して確かめようとしているのである。そこには「たとひ弥陀に帰命すといふとも、善知識なくは、いたすらごとなり。このゆえに、われらにおいては善知識ばかりをたのむべし」と主張する者が出てきている状況があった。それ故、善知識の能、つまりできることとできないことを明確にし、善知識ばかりを本とすることは大きな誤りである、<sup>⑰</sup>と断言切っているのである。

この視点に立つてみると、次の資料に出てくる、宿善無宿善の機を沙汰せよという意味も自ずと見えてくるのでは

ないかと思われる。それは人を勸化・教化しようとする者に対して、宿善・無宿善の道理を分別せよ、と呼びかけていく言葉であって、人を類別せよといっているのではないことが分かる。つまり、善知識づらをして人を教化できると思っている指導者意識を諷める言葉なのである。

それ、当流の他力信心のひととおりをすすめんとおもわんには、まず宿善・無宿善の機を沙汰すべし。【中略】  
されば無宿善の機のまえにおいては、正雜二行の沙汰をするときは、かえりて誹謗のもといとなるべきなり。この宿善・無宿善の道理を分別せずして、手びろに世間のひとをもはばからず勸化をいたすこと、もつてのほかの当流の掟にあいそむけり。

(真宗史料集成第二卷二一五頁)

信心を人に勧めているつもりが逆に謗法の基礎をつくることになる、この道理をわきまえよ、というのが蓮如の意図である。「手びろに世間のひとをもはばからず勸化」することの根には、自らの教化能力に対する自負心がある。そのことがもっている陥穽を蓮如は指摘しているのである。同じ御文には「われひとりよくしりがおの風情は、第一に憍慢のころにあらずや」という言葉も見える。教化者意識の憍慢を知らせんとするところに、宿善・無宿善の沙汰ということがある。

同じ趣旨のことは次の御文にも述べられている。

当流の実義は、まずわが安心を決定して、そののち人をも勸化し聖教をもよむべし。それ真宗一流の信心のひととおりをすすめんとおもわば、まず宿善無宿善のいわれをしりて仏法をば讚嘆すべし。されば、往古より当流門下にその名をかけたるひとなりとも、過去の宿縁なくば、信心をとりがたし。まことに宿善の機はおのずから信心を決定すべし。それに、無宿善の機のまえにおいて、一向専修の名言をさきとし、正雜二行の沙汰をするときは、かえりて誹謗のもといとなりぬべし。この宿善・無宿善のふたつの道理をこころえずして、手びろに世間者をもいづくをもはばからず、勸化をいたすこと、もつてのほかの当流のおきてにあいそむけり。

勸化の方法が間違っているというのではなく、勸化できるという発想そのものが傲慢であることを知らせ、批判している。そこに、教化者意識に立っている者自身が回心懺悔することの重要性が説かれることになる。

それ、中古以来当時いたるまでも、当流の勸化をいたすその人数のなかにおいて、さらに宿善の有無ということとをさらずして勸化をなすなり。【中略】各々に改悔の心をおこして、わが身のあやまれるところの心中を心底にのこさずして、当寺の御影前において、回心懺悔して、諸人の耳にこれをきかしむるように毎日毎夜にかたるべし。これすなわち「謗法闍提回心皆往」の御釈にもあいかない、また「自信教人信」の義にも相応すべきものなり。さらばまことにころあらん人々は、この回心懺悔をききても、げにもとおもいて、おなじく日ごろの悪心をひるがえして善心になりかえる人もあるべし。これぞまことに今月聖人の御忌の本懐にあいかなうべし。

各々が宗祖聖人の教えに背き、お互いに迷いを深めていることを回心懺悔する、そのことが迷いを翻す唯一の道であり、それ以外に「自信教人信」といつても、どこにもないことが押さえられている。

このように見てくると、次のように確かめることができると思う。蓮如において宿善とは、第一に信心の獲得は、宿善の開發によるのであって人間の生まれや能力や経歴といった個人的資質によるのではないということ、第二に、その宿善とは仏智のもよおしという言葉に代表される阿弥陀仏のはたらきであって、人間が積み上げる善根ではないこと、それ故第三に、人を勸化するということは、人間の思い計らいをこえているということ、である。

## 五 念仏者の使命

最後に注意しておきたいのは、仏法が伝わるのは仏法自身のはたらきであるが、だからといって人間は何もせずに

待っているということの意味しないということである。たとえば、

時節到来と云う事、用心をもし、そのうえに事の出来候うを、時節到来とはいふべし。無用心にて事の出来候うを、時節到来とはいわれぬ事なり。聴聞を心がけての上の宿善無宿善ともいう事なり。ただ信心はきくにきわまれることなるよし、仰せの由候。

(実悟旧記「蓮如上人行実」八〇頁)

と述べられる。ここには人間の分限において果たすべき課題が「聴聞」として明確にされている。信心獲得せよ、弥陀をたのめ、安心決定せよ、と呼びかけ続けた蓮如の意図はここにある。それ故、最晩年の御文にいたるまで、「宿善まかせ」ということを心得た上で、人々に親鸞の教えを呼びかけ続けていった、それが蓮如の生涯を尽くしての仕事であった。

愚老、当年の夏ごろより違例せしめて、いまにおいて本腹のすがたこれなし。ついには当年寒中には、かならず往生の本懐をとぐべき条、一定とおもいはんべり。あわれ、あわれ、存命のうちに、みなみな信心決定あれかしと、朝夕おもいはんべり。まことに宿善まかせとはいいいながら、述懐のころしばらくもやむことなし。

(真宗史料集成第二卷二八六頁)

### 【参考文献】

曾我量深著『歎異抄聴記』(一九七二年 彌生書房刊)

廣瀬杲著『歎異抄の諸問題』(一九七八年 法蔵館刊)

### 【註】

引用文献の仮名・漢字の表記については、現代仮名遣いおよび新字体に改めたことを、お断りしておく。

① 『曾我量深選集』第六卷「歎異抄聴記」一九頁。

- ② 『定本親鸞聖人全集』言行篇(2)四二頁。
- ③ 西田真因氏「歎異抄奥書における蓮如上人の無宿善の概念について(一)」(『教化研究』一一〇所収)
- ④ 『宮崎園道著作集』第二卷一六一頁。
- ⑤ 『歎異抄聞記』一〇六頁。蓮如と『歎異抄』との関係については、妙音院了祥の見解に負うところが多い。
- ⑥ 林智康氏「蓮如上人に学ぶ―『歎異抄』と『御文章』―」(『教学研究所紀要』第4号所収)に詳しい。
- ⑦ 『定本親鸞聖人全集』和讃篇一一四。もとはすべて仮名書きであるが、適宜漢字に改めた。
- ⑧ 『定本親鸞聖人全集』言行篇(2)九頁。
- ⑨ 『蓮如上人御一代記聞書』で見ても、「他力大行の催促」、「自ずから念仏の中され候うこそ、仏智の御もよおし、仏恩の称名なれ」、「御もよおしにより、念仏を申すなり」などがある。
- ⑩ 『定本親鸞聖人全集』漢文篇一三八頁。
- ⑪ 稲葉昌丸編『蓮如上人行実』一一五頁。
- ⑫ 『真宗史料集成』第二卷一四一頁。
- ⑬ 稲葉昌丸編『蓮如上人行実』八〇頁。
- ⑭ 『定本親鸞聖人全集』教行信証三〇二頁。
- ⑮ 『真宗史料集成』第二卷一九三頁。
- ⑯ 『真宗史料集成』第二卷二一五頁。